

日本におけるサービス・ラーニングの展開 (11) ——東日本大震災におけるボランティア活動経験者の意識や 態度「大学生のボランティア活動に関する調査」より——

柴田 和子^{*1} 山田 一隆^{*2}
富川 拓^{*3} 中根 智子^{*4}

Development of Service Learning in Japan Part 11 : Volunteer Experiences about their Consciousness and Attitude through the Great East Japan Earthquake- from “Research on Volunteer Activities of University Students”

Kazuko SHIBATA^{*1}, Kazutaka YAMADA^{*2}
Taku TOMIKAWA^{*3}, Satoko NAKANE^{*4}

This time, I would like to show you how the participation of volunteer activity effects the school students, using a paper “The statistics about the volunteer activities of college students”.

In this paper, I found that objective participants could be separated for two groups. One was the students who got good influence joining the project and most of them are participated several times already like these volunteer activities.

Other group was the students who could not find a good result joining this activity, and their answers were “I would not participate like this activity in future”.

How come like this deference had been caused? It might not be ones favor, but one’s own talent did not fit for the activity I guess.

1. はじめに

我が国のボランティア活動による社会貢献の形は、1995年の阪神・淡路大震災が勃発した「ボランティア元年」以降、社会的気運の盛り上がりとともに人々に認知され、今日に至っている。例えば、災害現場におけるボランティア従事者の姿は今や珍しいものではなく、数々の災害現場では、不可欠な存在となっている。東日本大震災の勃発時も150万人以上のボランティアが現地に赴いたり在住地で可能な支援に従事したりした。

このようなボランティア活動などの社会貢献活動は、現在、学校現場でも数多く導入されている。その背景には、家庭や地域社会の教育力の低下などの様々な問題、それに伴う子どもたちの

*1 龍谷大学社会学部兼任講師

*2 岡山大学地域総合研究センター准教授

*3 聖泉大学人間学部准教授

*4 龍谷大学国際学部講師

精神的な自立の後れや社会性の不足などの問題が指摘されるようになってきたことにある。中央教育審議会では、2002年「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策について」において、次世代を担う子どもたちが、規範意識や道徳心等を育成し、社会性、他人を思いやる心などを身に付け、豊かな人間性を育むよう、学校教育において社会奉仕体験活動やインターンシップ等の様々な体験活動を充実させることを推進した。これを受けて大学などの高等教育機関では、正課科目や課外実習としてボランティア関連科目を開設し、サービス・ラーニングの導入も本格的に始めた。また、学生の社会参画活動を組織的に支援することを目的として、学内にボランティアセンターを設置する動きも見られた。中等教育においても総合的学習の時間を活用した体験活動が実施され、東京都立高等学校では、2007年から教科「奉仕」が必修科目として開始されることになり、注目を集めた。2013年に出版された中央教育審議会「今後の青少年の体験活動の推進について」でも、「社会を生き抜く力」として必要となる基礎的な能力を育み、規範意識・道徳等の育成、自然や人とのかかわりを通じた仲間とのコミュニケーションや自分自身との対話、実社会との関わり等を考える契機として体験活動を引き続き奨励している。

このような教育現場におけるボランティア・奉仕活動の推進は、総務省が5年ごとに行う「社会生活基本調査」のデータにも反映されている。1996年から5年ごと20年間の調査結果を見ると、高校生・大学生に値する15歳～19歳、20歳～24歳のボランティア活動行動率は、15歳～19歳は、1996年の15%から2001年以降は20%台へ上昇し、20～24歳は、1996年の12%から2001年以降20%前後へと上昇している。高齢層、中年層のボランティア活動率が20年間ほぼ横ばいで高い値を示している中で、若年層の伸びが著しい。しかし、これらのデータが示すのは、ボランティア活動参加率だけで、ボランティア・奉仕活動体験が、政府が掲げる規範意識や社会性、他者理解などの豊かな人間性への効果を醸成するかどうかは明らかではない。

本稿では、大学生に行った「大学生のボランティア活動に関する調査」を用いながら、実際にボランティア活動に参加した人たちのボランティア活動に関するイメージや活動の効果に関して明らかにする。小中高校時代、東日本大震災が起きた時、大学入学後の3つの次元におけるボランティア活動の継続性に注目して、ボランティア活動が「社会を生き抜く力」を促進させるのかどうかについて検証していく。

2. 調査概要

本調査は、ボランティア活動への参加有無やその内容、ボランティア関連授業の履修について首都圏と関西圏の大学生を対象に調査を行った。首都圏の8大学（創価大学、帝京大学、大正大学、日本大学、東洋大学、中央大学、立教大学、早稲田大学）、及び関西圏の3大学（佛教大学、龍谷大学、聖泉大学）において、各大学に在籍する教員の協力を得て実施された。主に低年次生配当の授業において、学生に質問紙を配布・回収する方法で2014年に実施した。有効回答数は、1,619（首都圏の8大学1,004、関西圏の3大学615）であった。

3. 結果と考察

3-1. 小中学校時、東日本大震災関連ボランティア、大学でのボランティア経験の有無

調査では、ボランティア活動経験について2つの時期を区分して尋ねている。すなわち、①大学

表1 ボランティア活動経験

小中高校での活動	東日本大震災勃発時の活動	大学での活動	% (人)
○	○	○	6.3 (93)
○	×	×	19.0 (279)
○	○	×	10.8 (159)
○	×	○	6.0 (88)
×	○	×	3.7 (55)
×	○	○	4.0 (59)
×	×	○	8.0 (118)
×	×	×	42.0 (617)
計			100.0(1468)

* ○は活動したことを示す。×は活動していないことを示す。

入学前のボランティア活動経験の有無についての質問、②大学入学後に行ったボランティア活動経験の有無についての質問である。さらに、今回は、ボランティア活動の中でも大きく報道された③東日本大震災におけるボランティア活動体験の有無についても尋ねた。

その結果、①大学入学前のボランティア活動経験の有無についての質問に対しては、「ボランティア活動経験あり」が44.3% (681人)、「なし」が55.7% (857人)であった。

②大学入学後に行ったボランティア活動経験の有無については、「大学入学後ボランティアを現在している・以前したことがある」が24.7% (372人)、「まったくしたことがない」が75.3% (1133人)であった。

③東日本大震災におけるボランティア経験の有無について「東日本大震災の被災者・被災地のためのボランティア活動(募金等を含む)にこれまで参加したことがありますか」との質問に対して、「活動経験あり」が22.6% (366人)、「なし」が77.4% (1253人)であった。

表1は、これらボランティア経験の有無について結果を表したものである。①小中高校時、③東日本大震災勃発時、②大学入学後の3つの時期におけるボランティア活動経験の有無により8パターンに再分類した(表1)。

その結果、調査回答者1468人中、小中高校時代、東日本大震災におけるボランティア活動、大学入学後のボランティア活動とどの時期においてもボランティア活動を行っているのは6.3% (93人)と1割にも満たない。それに対して、どの時期にもボランティア活動を行っていないのは、42.0% (617人)と4割以上にのぼった。逆に言えば、いずれかの時期にボランティア活動を行っている人は約6割に達する。その中でも小中高校の時期にボランティア活動を行った人を合計すると41.3%にものぼり、大学生からボランティア活動を始めた人の14.0%と比較すると、小中高校生でボランティア活動を始めた人の方が多いことが分かる。

3-2. 東日本大震災でボランティア活動を行った学生の属性

3-2-1. 東日本大震災ボランティア経験者の4類型

本稿では、東日本大震災におけるボランティア活動経験者に着目し、どのような人々が活動を行ったのかについて明らかにしていく。その際に、東日本大震災におけるボランティア活動経験者をさらに、ボランティアの継続性の観点から、小中高校時のボランティア活動経験、大学生の時期のボランティア活動経験の有無と組み合わせて4類型を作成し、名称を付した。これは、1995年に勃発した阪神・淡路大震災におけるボランティア活動経験者に対するアンケートを分析する際に用

表2 震災ボランティア4類型

類型	小中高校での活動	東日本大震災勃発時の活動	大学での活動	% (人)
継続型	○	○	○	25.4 (93)
覚醒型	×	○	○	16.1 (59)
瞬発型	×	○	×	15.0 (55)
停止型	○	○	×	43.4 (159)
計				100 (366)

* ○は活動したことを示す。×は活動していないことを示す。

いた4類型と同一である(柴田ら2000)。本稿では、大学生に限定した調査であるため、震災以前の活動を小中高校時の活動、震災以降の活動を大学入学以降の活動と置き換えている。同様の分類形式を取ることで、20年前の震災ボランティアとの比較が可能になると考えられる。

表2は、東日本大震災勃発の震災ボランティア経験者の類型と実数である。4類型の分類は以下の通りである。

「継続型」：小中高校時、東日本大震災時、大学入学以降にボランティア活動を行っている。

「覚醒型」：小中高校時にはボランティア活動を行っていないが、東日本大震災のボランティアを機に大学入学後にボランティア活動を行った。

「瞬発型」：東日本大震災のボランティア活動のみを行い、それ以前もそれ以降もボランティア活動を行っていない

「停止型」：小中高校時、東日本大震災時にはボランティア活動を行ったが、大学入学以降はボランティア活動を行っていない

4類型の中で一番多いのは「停止型」43.4% (159人)で、小中高校、震災時にはボランティア活動を行ったが、高校生から大学生への環境の変化からか大学入学後はボランティア活動に携わっていないタイプである。

その次に多いのが、「継続型」25.4% (93人)で、小中高校のいずれかの時期に活動し、東日本大震災勃発時も大学入学以降も活動を行っているタイプである。3番目は、東日本大震災におけるボランティア活動以降、大学でもボランティア活動を行っている「覚醒型」16.1% (59人)である。一番少数なのが東日本大震災におけるボランティア活動のみを行い、震災以前も震災以降も活動を行っていない「瞬発型」15.0% (55人)で、ボランティア活動が一過性のものになっているタイプである。

3-2-2. 4類型別属性：性別、所属、高校卒業地域、社会貢献関連科目の有無

表3は、前述した震災ボランティアの4類型別に属性をまとめたものである。

類型別にみた参加学生の性別は、「覚醒型」は、男性の参加が6割以上と多く、男女で明らかに差が見られる。しかし、それ以外の「継続型」「瞬発型」「停止型」では、男女比は、ほぼ1対1で、タイプごとの差はあまり見られない。

東日本大震災が勃発した2011年当時、回答者は高校生の場合と大学生の場合がある。ここでは、1993年以降生まれを高校生として割り出した。「継続型」「覚醒型」の場合は、大学時に東日本大震災におけるボランティア活動を行った人の割合が6割で、その後ボランティア活動が継続していることから、比較的時間の融通が利く大学生であったことがその後の活動に影響を与えているといえる。「瞬発型」「停止型」は、前述した2タイプとは異なり、高校生の時が7割にもの

表3 震災ボランティア4類型の属性

		継続型	覚醒型	瞬発型	停止型	sig.
性別	男性	42.9	62.5	51.9	46.2	
	女性	56.0	35.7	46.3	51.9	
	どちらでもない	1.1	4.8	1.9	1.9	
	計	100.0 (91)	100.0 (56)	100.0 (54)	100.0 (156)	
活動時の所属場所	大学生	56.7	57.1	31.5	28.2	**
	高校生	43.3	42.9	68.5	71.8	
	計	100.0 (90)	100.0 (56)	100.0 (54)	100.0 (156)	
高校卒業地域	北海道・東北地方	4.4	3.4	7.7	5.4	**
	関東地方	59.3	63.8	40.4	39.9	
	中部地方	7.7	10.3	5.8	9.5	
	近畿地方	18.7	13.8	36.5	34.2	
	中国地方	1.1	5.2	0.0	2.5	
	四国地方	2.2	0.0	0.0	1.9	
	九州・沖縄地方	3.3	3.4	3.8	3.2	
	高校認定・海外	3.3	0.0	5.8	3.8	
	計	100.0 (91)	100.0 (58)	100.0 (52)	100.0 (158)	
社会貢献・奉仕活動 科目受講の有無	社会貢献・奉仕活動科目受講あり	26.4	8.5	11.1	18.7	*
	受講なし	73.6	91.5	88.9	81.3	
	計	100.0 (91)	100.0 (59)	100.0 (54)	100.0 (155)	

**p<.01, *p<.05

ばる。どちらもその後はボランティア活動を行っていないことから、生活環境の変化により、ボランティア活動が継続したものにならなかったことが考えられる。このことから大学に入学してから東日本大震災におけるボランティア活動を行った人の方がボランティア活動を継続しているようである。

東日本大震災が勃発した東北地方との関係を調べるため、卒業高校の所在地について尋ねた。ただし、調査対象学生を関東圏と関西圏の大学生に限定しているため、卒業高校の所在地についても偏りは生じている。震災ボランティア活動参加者の高校所在地の中で多いのは関東地方 47.4% (189 人)、近畿地方 28.1% (112 人)、中部地方 9.8% (39 人) であった。東北地方で起こった災害にも関わらず、近畿圏の学生や中部地方の学生だけでも全体の 4 割近く参加していることは、東日本大震災における災害ボランティアの関心の高さを物語っている。ただし、この数値には現地活動だけではなく募金活動などの現地外で行った活動が活動参加者比率を押し上げているとも考えられる。

さらに、震災ボランティア 4 類型別に詳細を見ていくと、「継続型」「覚醒型」は関東地方の学生が 6 割、近畿地方が 2 割、中部地方が 1 割であった。それに対して「瞬発型」「停止型」の場合は、関東地方が 4 割と少なく、近畿地方が 4 割と東日本地域以外が多くなっている。遠方での震災ボランティアが負担となり、その後のボランティア活動の継続に対して影響を与えている様子が伺える。

次に、高校生時に社会貢献、奉仕活動関連科目を必修科目として、あるいは選択科目として受講

した人について見ていく。全調査対象者 1539 人中社会貢献、奉仕活動関連科目の受講者は 15.0% (232 人) であった。全体的に高校での社会貢献・奉仕活動関連科目を受講している人は多くない。4 類型別に見ると、高校での社会貢献・奉仕活動関連科目を受講している人は「継続型」が 3 割、「停止型」が 2 割と他 2 タイプと比較するとやや高い値であった。小中高校時代に何らかのボランティア活動を行っているタイプが「継続型」「停止型」であることから、小中高校時のボランティア活動を行うきっかけとして社会貢献、奉仕活動科目の受講が関連していると考えることができる。

3.3. 東日本大震災におけるボランティア活動参加者の特性

3.3-1. ボランティア活動イメージと 4 類型の関連性

ボランティア活動イメージは、ボランティア活動経験の有無や活動の継続性により差異が表れると予測される。本調査では、「あなたがボランティア活動にのぞむ場合の、あなた自身の意見や態度についてお答えください」というボランティア活動のイメージについての問いを設けた。質問項目群については、Reeb, Roger N et al. (1998) のサービス・ラーニングの調査項目に筆者らが行ったこれまでの調査に基づき変更を加え、「活動の中でちゃんと役立つことができる」「自分の興味や能力にあった活動を見つけることができる」「活動を行う時に、リーダーとうまくやることができる」「活動に加わることで、頑張っている人を手助けできる」「活動を通じて、自分の問題を解決することができる」という自己の能力を発揮できるソーシャル・スキルの項目群、「活動を通じて、地域社会を良くすることができる」「活動を通じて、正しい社会の実現に役立つことができ

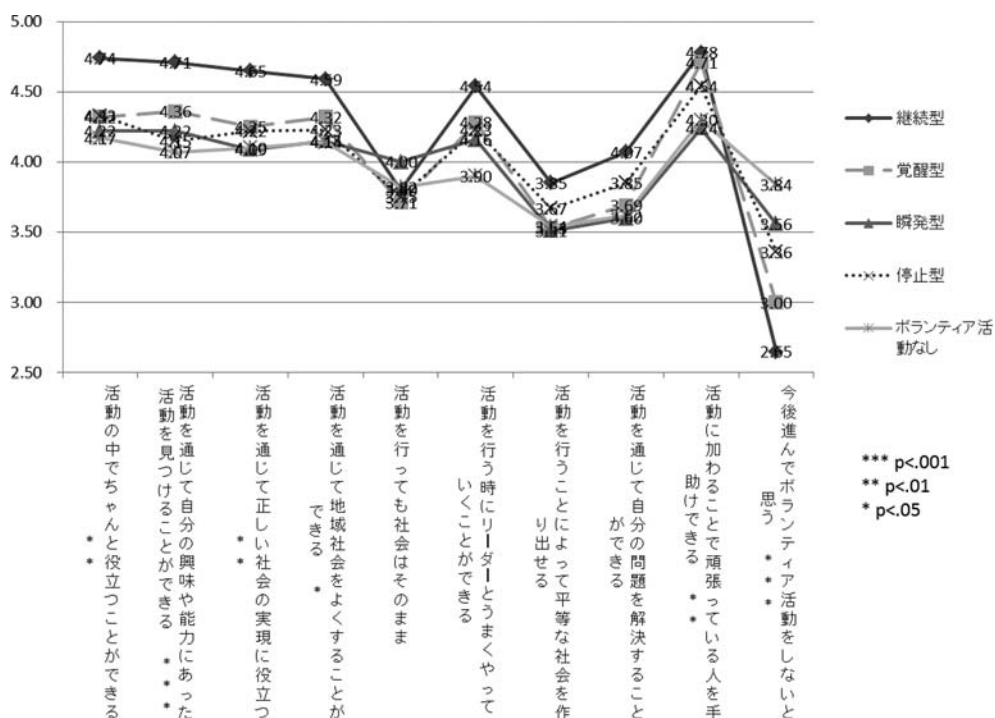


図 1 ボランティア活動イメージの平均値

る」「活動を行うことによって平等な社会を作り出せる」「活動を行っても社会はそのままである」というボランティア活動の可能性に関する項目群、「今後自ら進んでは、ボランティア活動をしたくないと思う」という今後のボランティア活動参加への可能性に関する項目の10項目を考案した(大東2014)。そして、これら10項目に対して、「非常にそうだ」「かなりそうだ」「ややそうだ」「やや違う」「かなり違う」「非常に違う」の選択肢を設け、最高点を6点、最低点を1点とした。各項目の平均点は、3.5点である。

次に、震災ボランティア活動4類型、すなわち「継続型」「覚醒型」「瞬発型」「停止型」ごとに、上記のボランティア活動イメージ10項目について一元配置の分散分析を用いて平均値の差の検定を行い、平均値をグラフ化した。参考のために、ボランティア活動を全く行ったことがないグループの平均値も加筆している。

その結果、4類型において0.1%水準で有意であったものは、「自分の興味や能力にあった活動を見つけることができる」「今後自ら進んでは、ボランティア活動をしたくないと思う」であった。1%水準で有意であったものは、「活動の中でちゃんと役立つことができる」「活動を通じて、正しい社会の実現に役立つことができる」「活動に加わることで、頑張っている人を手助けできる」であった。5%水準で有意であったものは、「活動を通じて、地域社会を良くすることができる」であった。実際にボランティア活動を経験したことで自身の具体的な活動結果が活動イメージの回答に反映され、より平均値の差が広がったと考えられる。

次に、ボランティア活動イメージにおいて4類型すべてで平均値4.0を上回った項目は、「活動の中でちゃんと役立つことができる」「自分の興味や能力にあった活動を見つけることができる」「活動を行う時に、リーダーとうまくやっていくことができる」「活動に加わることで、頑張っている人を手助けできる」といった自己の能力を発揮できるソーシャル・スキルの項目群と「活動を通じて、地域社会を良くすることができる」「活動を通じて、正しい社会の実現に役立つことができる」といったボランティア活動の可能性に関する項目群であった。ボランティア活動を行うことで、活動そのものや他者支援への有用感、自己の技術を磨きスキルアップすることができることへの期待感、地域社会の改善や社会改良へ期待感を持つことができるとイメージしている。以上のことから、自己に関して及び地域社会をなどの身近に広がる社会を改善する際にはボランティア活動を行うことは有用だと感じているが、大きな「社会」を改善するにはボランティア活動は有用ではないと感じていることが読み取れる。

では、ボランティア活動意識が4類型でどのように異なるかを、一元配置の分散分析とTukey法を用いた多重比較を行ない、検討した(表4)。

類型ごとに詳しく見ていくと、「継続型」は、「活動の中でちゃんと役立つことができる」「活動に加わることで、がんばっている人を手助けできる」「活動を通じて自分の興味や能力にあった活動を見つけることができる」「活動を通じて、自分の問題を解決することができる」といったソーシャル・スキルの項目群、「活動を通じて正しい社会の実現に役立つ」「活動を通じて地域社会を良くすることができる」といったボランティア活動の可能性に関する項目群が、4類型中最も高く、「瞬発型」との間に有意な差が認められた。また、「今後自ら進んではボランティア活動をしたくないと思う」といった活動への参加可能性の項目に関しては、最も低い値を示し「瞬発型」と「覚醒型」「停止型」と「継続型」との間に有意な差が認められた。このことから、ボランティア活動を行う

表4 ボランティアイメージと震災ボランティア4類型
(各群の平均値とSD及び多重比較の結果)

項目	継続型	覚醒型	瞬発型	停止型	F 値
活動の中でちゃんと役立つことができる 「継続型」>「瞬発型」	4.74 (0.81)	4.32 (1.15)	4.22 (0.74)	4.33 (0.89)	5.60**
自分の興味や能力にあった活動を見つけることができる 「継続型」>「停止型」	4.71 (0.88)	4.36 (1.09)	4.22 (0.92)	4.15 (0.92)	7.13***
活動を通じて、正しい社会の実現に役立つことができる 「継続型」>「瞬発型」	4.65 (0.92)	4.25 (1.14)	4.09 (0.84)	4.22 (0.95)	5.40**
活動を通じて、地域社会を良くすることができる 「継続型」>「瞬発型」	4.59 (0.99)	4.32 (1.12)	4.15 (0.97)	4.23 (1.04)	2.95*
活動を行っても、社会はそのままである	3.80 (1.33)	3.71 (1.21)	4.00 (1.04)	3.75 (1.08)	0.78
活動を行う時に、リーダーとうまくやっていくことができる	4.54 (0.97)	4.28 (1.25)	4.16 (0.79)	4.23 (0.99)	2.39
活動を行うことによって、平等な社会を作り出せる	3.85 (1.15)	3.53 (1.28)	3.51 (1.12)	3.67 (1.11)	1.39
活動を通じて、自分の問題を解決することができる 「継続型」>「瞬発型」	4.07 (1.14)	3.69 (1.25)	3.60 (1.01)	3.85 (1.01)	2.61
活動に加わることで、がんばっている人を手助けできる 「継続型」>「瞬発型」	4.78 (0.85)	4.71 (1.07)	4.24 (0.94)	4.54 (0.93)	4.41**
今後自ら進んでは、ボランティア活動をしなと思う 「瞬発型」>「覚醒型」「停止型」>「継続型」	2.65 (1.49)	3.00 (1.41)	3.56 (1.18)	3.36 (1.27)	7.62***

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

ことそのものへの有用感や他者を支援することへの有用感を感じ、より主体的に活動に関わることでソーシャル・スキルを高めていこうとする意欲が高いことが考察される。ボランティア活動を行うことにより、より良い社会が実現することへの高い期待感も持ちあわせている。そして、今後の積極的なボランティア活動参加を自ら強く望んでいる。このタイプは、ボランティア活動に対して全般的に肯定的な意見や態度を持っているといえる。

次に、「停止型」の場合は、「自分の興味や能力にあった活動を見つけることができる」といったソーシャル・スキルの項目群で最も低い値を示し、「継続型」との間に有意な差が認められた。また、「今後自ら進んでは、ボランティア活動をしなと思う」というボランティア参加可能性の項目群で高い値を示し、「継続型」との間に有意差が認められた。このことから、東日本大震災におけるボランティア活動では、自分の興味や能力と合致しないボランティア活動を行った可能性もあり、震災ボランティア活動経験そのものがボランティア活動をマイナスのイメージに捉えるきっかけとなり、その後のボランティア活動を行う上で支障をきたしていると推察できる。

「瞬発型」の場合は、「活動の中でちゃんと役立つことができる」「活動に加わることで、がんばっている人を手助けできる」「活動を通じて、自分の問題を解決することができる」としたソーシャル・スキルの項目群、「活動を通じて、正しい社会の実現に役立つことができる」「活動を通じて、地域社会を良くすることができる」としたボランティア活動の可能性に関する項目群が4類型中一番低い値を示し、「継続型」に比べて有意に低かった。また、「自ら進んではボランティア活動をしなと思う」については、最も高い値を示し、「覚醒型」に対して有意に高い値であった。一度のボランティア活動経験だけでは、自己効用感や他者支援の意識などのソーシャル・スキルの向

上を感じることはできないし、社会に対するボランティア活動の有用感などボランティア活動の可能性に関して感じていないということができる。そして、東日本大震災というあまりにも大きな災害被害の前に、たとえ活動を頑張っても、社会を変えていくことはできないと大きな無力感を感じ、ボランティア活動自体に負のイメージを持つようになったとも考えられる。

なお、「覚醒型」では、「今後自らは、ボランティア活動をしないと思う」の項目だけが「瞬発型」と比較して有意に低い値であった。東日本大震災におけるボランティア活動の後、大学時にも何らかのボランティア活動を行っていることから、ボランティア活動を行うことは、それほど抵抗がないものと思われる。

3-3-2. ボランティア活動に対する評価や得た成果

本調査では、ボランティア活動を過去に行ったことがある人、現在も継続している人などボランティア活動経験者に対して、「あなたが、これまでのボランティア活動で得た成果や、活動してよかったことについてお答えください」との質問で、ボランティア活動に対する評価や得た成果について23項目の質問を作成した。これらの質問項目は、筆者のひとりである山田一隆が開発した項目に加え、菊池章夫(1988)が提案する「社会的スキル(KiSS-18)」のうちから、本調査の趣旨に沿う7項目を追加し、大東貢生ら(2014)から本調査に至るまでに、独自の項目が追加され、23項目となっている(山田・富川・大東2017)。

これらの項目は、文部科学省が教育振興計画(2013)で掲げた「自立・協働・創造に向けたひとりひとりの主体的な学び」の方向性の中で目標とする「社会を生き抜く力」についてあらゆる角度から検証しようとしているものである。これらを以下のように分類した。

課題探求能力：「企画・調整能力が身についた」「問題解決能力が身に付いた」「問題を発見する能力が高まった」「目標を上手く設定できるようになった」「逆境や困難に立ち向かう力が身に付いた」の5項目

自己との対話能力：「自信を身につけた」「自己表現能力が高まった」「感情を自制する力が身に付いた」の3項目

ソーシャル・スキル：「多様な出会いを得た」「社会的弱者を理解する力が身に付いた」「会話がとぎれなくなった」「人間関係を上手く持てるようになった」「感謝される気持ちを味わった」「人を助けることが上手になった」「初対面時の自己紹介が上手くなった」「協調性が身に付いた」の8項目

実社会との関わり：「身近な地域への関心が広がった」「社会への理解が広がった」「参加学生の社会的評価が高まった」の3項目

職業的自立に向かう能力：「キャリアビジョンの形成に貢献した」の1項目

学問への主体性：「専攻している学問分野に対する関心が高まった」「もっと勉強したいと思った」の2項目

活動への意識：「楽しさを味わった」の1項目

これら23項目に対して「まったくそう思わない」から「とてもそう思う」までの5件法で尋ね、「まったくそう思わない」を1点、「とてもそう思う」を5点とした。平均点は3点である。これらの項目に対して前述した震災ボランティア活動4類型別に平均値を算出しようとした。ところが、本調査では、東日本大震災におけるボランティア活動参加者に対して個別に回答を求めていなかった

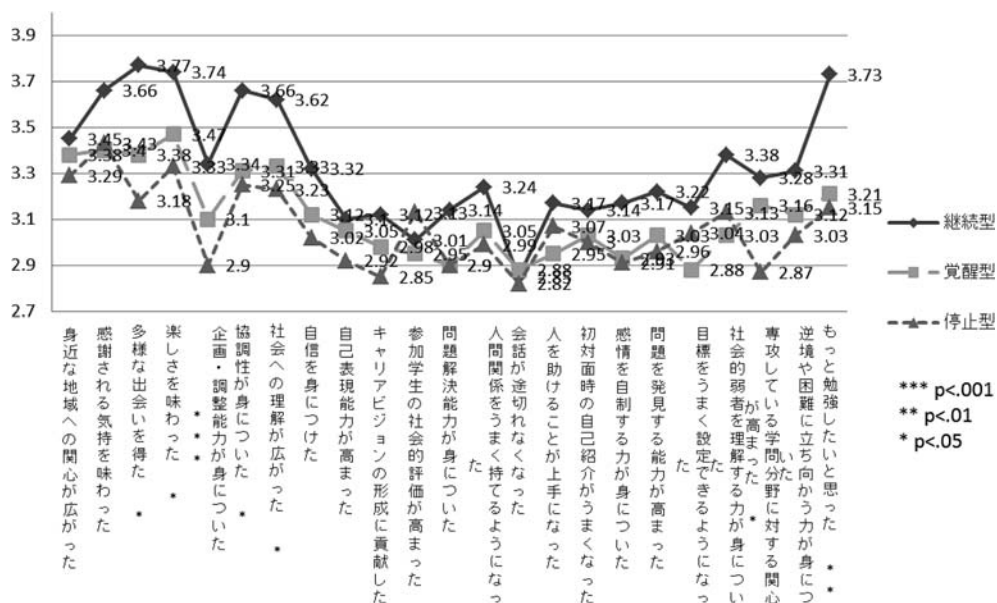


図2 ボランティア活動に対する評価や得た効果（平均値）

たため、東日本大震災における震災ボランティア活動のみを行った「瞬発型」に値する回答者を除いて「継続型」「停止型」「覚醒型」の3類型について一元配置の分散分析を行った（図2）。

その結果、0.1%水準で有意差のあった項目は、「企画・調整能力が身についた」、1%水準で有意差があったものは、「もっと勉強したいと思った」、5%水準で有意差があったものは、「多様な出会いを得た」「楽しさを味わった」「協調性が身についた」「社会への理解が広がった」「先行している学問分野に対する関心が高まった」であった。

有意差のあった項目には、学問への主体性グループの2項目中2項目が、活動への意識グループの1項目が含まれることから、行った活動に対して肯定的な評価を行ったかどうか、学問への主体性を喚起させるような活動を行ったかどうか、ボランティア活動を継続する上で、大きく影響していると推測できる。

さらに、図2から、3類型すべてで平均点3.0点を上回った項目は、11項目であった。「感謝される気持を味わった」「多様な出会いを得た」「協調性が身についた」「初対面時の自己紹介がうまくいった」「社会的弱者を理解する力が身についた」といったソーシャル・スキルの項目群、「身近な地域への関心が広がった」「社会への理解が広がった」といった実社会との関わりに関する項目群、「自信を身につけた」「楽しさを味わった」といった自己との対話能力に関する項目群、「逆境や困難に立ち向かう力が身についた」といった課題探求能力に関する項目群、「もっと勉強したいと思った」といった学問への主体性に関する項目群であった。特に、ソーシャル・スキルの項目群は8項目中5項目、実社会との関わりの項目群は、3項目中2項目が平均点3.0点を上回り、成果があったと評価している。

反対に、平均点3.0点を下回った項目は、「企画・調整能力が身についた」「問題解決能力が身についた」「問題を発見する能力が高まった」「目標を上手く設定できるようになった」といった課題探求能力に関する項目群や、「キャリアビジョンの形成に貢献した」の職業的自立に向かう能力項

表5 ボランティア活動に対する評価や得た成果と震災ボランティア3類型
(各群の平均値とSD及び多重比較の結果)

項目	継続型	覚醒型	停止型	F 値
身近な地域への関心が広がった	3.45(1.18)	3.38(1.23)	3.29(1.06)	0.55
感謝される気持ちを味わった	3.66(1.26)	3.40(1.31)	3.43(1.13)	1.19
多様な出会いを得た 「継続型」>「停止型」	3.77(1.33)	3.38(1.36)	3.18(1.08)	6.35**
楽しさを味わった	3.74(1.27)	3.47(1.20)	3.33(1.00)	3.51*
企画・調整能力が身についた 「継続型」>「停止型」	3.34(1.18)	3.10(1.10)	2.90(0.85)	5.11**
協調性が身についた 「継続型」>「停止型」	3.66(1.13)	3.31(1.17)	3.25(0.97)	4.29*
社会への理解が広がった	3.62(1.22)	3.33(1.26)	3.23(1.01)	3.26*
自信を身につけた	3.32(1.12)	3.12(1.16)	3.02(0.90)	2.34
自己表現能力が高まった	3.10(1.04)	3.05(1.18)	2.92(0.86)	0.98
キャリアビジョンの形成に貢献した	3.12(1.12)	2.98(1.18)	2.85(0.89)	1.86
参加学生の社会的評価が高まった	3.01(1.06)	2.95(0.91)	3.13(0.95)	0.79
問題解決能力が身についた	3.14(1.03)	2.90(1.05)	2.90(0.82)	2.11
人間関係をうまく持てるようになった	3.24(1.15)	3.05(1.26)	2.99(0.87)	1.60
会話が途切れなくなった	2.85(0.98)	2.88(1.16)	2.82(0.89)	0.76
人を助けることが上手になった	3.17(1.06)	2.95(1.07)	3.07(0.83)	1.00
初対面時の自己紹介がうまくなった	3.14(1.12)	3.03(1.09)	3.00(1.00)	0.50
感情を自制する力が身についた	3.17(1.04)	2.93(1.09)	2.91(0.90)	2.12
問題を発見する能力が高まった	3.22(1.02)	3.03(1.11)	2.96(0.87)	1.88
目標をうまく設定できるようになった	3.15(0.98)	2.88(1.12)	3.04(0.79)	1.54
社会的弱者を理解する力が身についた	3.38(1.06)	3.03(1.15)	3.13(0.98)	2.42
専攻している学問分野に対する関心が高まった 「継続型」>「停止型」	3.28(1.31)	3.16(1.17)	2.87(1.00)	3.86*
逆境や困難に立ち向かう力が身についた	3.31(1.07)	3.12(1.08)	3.03(0.90)	2.21
もっと勉強したいと思った 「継続型」>「停止型」「覚醒型」	3.73(1.31)	3.21(1.46)	3.15(1.07)	6.58**

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

目、「自己表現能力が高まった」「感情を自制する力が身に付いた」といった自己との対話能力に関する項目群、「人間関係を上手く持てるようになった」「会話がとぎれなくなった」といったソーシャル・スキルの項目群、「参加学生の社会的評価が高まった」とする実社会との関わりの項目群であった。特に課題探究能力に関する項目群については、5項目挙げたうちの4項目が平均点3点を下回っており、ボランティア活動を行ったとしても成果があまり上がっていないと評価していることが伺える。

それでは、震災ボランティアの3類型ごとにボランティア活動に対する評価やその成果がどのように異なるかを一元配置の分散分析とTukey法を用いた多重比較を行ない、検討した(表5)。

類型別に詳しく見ていくと、「継続型」は、どの項目においても常に他の類型よりは高い平均値を示した。特に平均値が3.5以上と高い値を示す項目には「感謝される気持ちを味わった」「多様な出会いを得た」「協調性が身についた」とするソーシャル・スキルの項目群、「社会への理解が広がった」の実社会との関わり項目群、「もっと勉強したいと思った」の学問への主体性に関する項目群、「楽しさを味わった」とする活動への意識項目であった。また、多重比較において有意な差が認められた項目は、「多様な出会いを得た」「協調性が身に付いた」といったソーシャル・スキルに

関する項目群、「企画・調整能力が身についた」といった課題探求能力に関する項目群、「専攻している学問分野に対する関心が高まった」「もっと勉強したいと思った」といった学問への主体性に関する項目群であった。いずれも「停止型」と比較して、有意に高い値となった。幼少期から青年期までの活動で、多くの多様な年齢の人と関わりながら協調性を養い、体験を積み重ねることにより、感謝されることへの嬉しさに目覚め、ボランティアに対する楽しさを大いに味わっている。そして、活動経験が社会へ目を向けるきっかけともなり、専門分野へのさらなる学習意欲や課題への探求意欲につながっている。ボランティアを継続することで向上心が現れ、「社会を生き抜く力」として必要となる能力を養う効果があると感じている。逆に言えば、自分がボランティア活動を行うことで楽しさやキャリア・アップにつながる技術が身につけていると自覚できているからこそ、ボランティア活動を継続しているともいえる。

一方、平均値がおしなべて低いのは「停止型」であった。中でも、平均値が3以下だった項目は、「企画・調整能力が身についた」「問題解決能力が身についた」「問題を発見する能力が高まった」「キャリアビジョンの形成に貢献した」といった課題探求能力に関する項目群、「人間関係をうまく持てるようになった」「会話が途切れなくなった」といったソーシャル・スキルに関する項目群、「感情を自制する力が身についた」といった自己抑制能力に関する項目群であった。そして、「継続型」と比べて有意に低い値を示したものは、「多様な出会いを得た」「協調性が身に付いた」といったソーシャル・スキルに関する項目群、「企画・調整能力が身についた」といった課題探求能力に関する項目群、「専攻している学問分野に対する関心が高まった」「もっと勉強したいと思った」といった学問への主体性に関する項目群であった。小中高校時代におけるボランティア活動と東日本大震災におけるボランティア活動を行ったが、活動を通してソーシャル・スキルや自己抑制能力、問題探求能力、専門分野への主体性を向上させることができず、取得することが望ましい成果や楽しさなどの達成感を感じていない様子が伺える。だからこそ、大学でボランティア活動を行わない「停止型」となっていることが考えられる。

なお、「覚醒型」は、他の型と比較して、有意な差を示す項目がなかった。唯一、「もっと勉強したいと思った」という学問への主体性項目群で「継続型」に比べて有意に低い値となった。

4. まとめにかえて

以上のような結果から、東日本大震災におけるボランティア活動に実際に参加した人たちの中でも、小中高校からボランティア活動を継続する人、東日本大震災におけるボランティア活動を契機に活動から退く人、活動を契機にボランティア活動を始める人の間に意識の違いがあることが明らかとなった。

「継続型」は、ボランティア活動を行うことで、ソーシャル・スキルが高まり、問題探究能力が高まり、大学で専攻している分野への主体的な学びの姿勢も見られる。つまり、文部科学省が奉仕活動・体験活動の効果として掲げている「社会を生き抜く力」が活動を継続することにより養われているといえることができる。ボランティア活動イメージに対して、ソーシャル・スキルの向上や、ボランティア活動の可能性に関して肯定する意識を持ちあわせている。あるいは、「社会を生き抜く力」を意識的につけるために、より主体的に活動に関わろうとしているのかもしれない。

反対に、「停止型」や「瞬発型」のような何らかの理由でボランティア活動を辞めた場合は、ボ

ランティア活動での評価や成果は低くなる。ソーシャル・スキルに関する項目群や課題探究能力に関する項目群、学問への主体性に関する項目群で有意に低い値が見られた。活動への成果が上がっていないことがボランティア活動を停止している要因の一つとも考えられる。そして、そのことがボランティア活動イメージに対しても低い値となって表れている。ただし、これらのイメージは、全くボランティアを行っていないグループよりは高いことから、活動を全く行っていない人よりは具体的な活動内容が理解できている点で、多少イメージが良くなっているといえることができる。ボランティアイメージやボランティア活動への評価の低さが、一過性の活動であることが原因であるのか、一度行った活動が意に沿わないものであったからなのかは明らかではないが、災害ボランティアという過酷な環境下でボランティア活動を行う場合は、通常のボランティアとは異なった活動を強いられている可能性もある。活動に適した能力が少ないにもかかわらず無理に努力を強いると、活動への嫌悪感も生じてしまうだろう。

このようなことから、災害ボランティアも含めてボランティア活動に繰り返し参加している一定数の人々にとっては、その後の生き方に大きな影響を与えているが、それ以外の人々にとっては、単に経験としての効果しか与えていないのではないかと推察できる。そのような見地から今回の調査結果を見直してみると、文部科学省が打ち出した奉仕活動・体験活動に関する方策は、一定のグループの能力開発には効果を発揮するが、すべての学生生徒に同じ効果を生むとはいえないとも読み取れる。個人個人の能力には特徴や差異があることを理解しながら、学校が関与するボランティア活動であれば、サービス・ラーニングの手法を取り入れながら、単なる体験に留まるのではなく、活動に対する振り返りなどを行い、活動への理解を深めることが必要である。また、「社会を生き抜く力」を取得する一つの手段としてボランティア活動を捉え、他の分野で自分に適合した能力を目覚めさせることができるような教科の開発や学生が主体的に関われる活動を促していくことが必要ではないかと考える。

付記

本研究は、平成 26 年度龍谷大学国際文化研究所研究「サービス・ラーニングの長期的影響」プロジェクト助成、及び、科学研究費助成事業「中等教育におけるサービス・ラーニングの影響に関する研究」(基盤研究 (c)、課題番号: 22530584、研究代表者: 大東貢生) の成果の一部である。

参考文献

- 菊池章夫, 1988, 『思いやりを科学する』, 川島書店。
- 文部科学省, 2002 「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1287510.htm (2016 年 9 月 26 日現在)
- 文部科学省, 2013, 「今後の青少年の体験活動の推進について」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/04/03/1330231_01.pdf (2016 年 9 月 26 日現在)
- 大東貢生・富川拓・柴田和子・古川秀夫・山田一隆, 2014, 「日本におけるサービス・ラーニングの展開 (6) - 一部活動連携型の奉仕体験活動が及ぼす影響 -」。龍谷大学国際社会文化研究所『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』16, 145-156。
- 大東貢生・富川拓・柴田和子・古川秀夫・山田一隆, 2010, 「日本におけるサービス・ラーニングの展開Ⅲ - ボランティアやサービス・ラーニングによる他者理解に向けて -」。佛教大学社会学研究会『佛大社会学』34, 46-52。
- Reeb Roger N. and Katsuyama, Ronald M. and Sammon, Julie A. and Yoder, David S, 1998. "The Community Service Self-Efficacy Scale: Evidence of Reliability, Construct Validity, and Pragmatic Utility" *Michigan Journal of*

Community Service Learning, 5 : 48-57.

柴田和子・古川秀夫, 2000, 「震災ボランティアの意識と行動－回顧と現在－」 龍谷大学国際社会文化研究所『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』3, 59-68。

富川拓・柴田和子・大東貢生・古川秀夫, 2008, 「サービス・ラーニングの研究と実践をめぐる諸課題」。佛教大学社会学研究会『佛大社会学』32, 9-18。

山田一隆・富川拓・大東貢生, 2017, 「日本におけるサービス・ラーニングの展開 (10)－高校時代のボランティア活動経験類型からみた大学生の態度や行動－」 龍谷大学国際社会文化研究所『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』19。